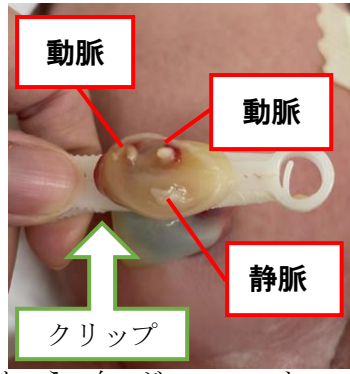


◆へその緒の不思議

産まれる前はお母さんと繋がっていたへその緒。存在はよく知っているとありますが、実際見たことありますか？家族に赤ちゃんが産まれると、そこで初めてまじまじと見ることになるのではないのでしょうか。

へその緒とは、医療用語で臍帯(さいたい)と呼ばれます。赤ちゃんが胎盤をつなぐひものようなもので、胎盤からの栄養や酸素を運ぶ血液を通すための血管が3本あります。この写真がへその緒



の断面図です。産まれたばかりの子のへその緒はまだ水々しく、3本の血管がよくわかります。血管を保護するように存在するクリップ色のものは、「ワルトン膠質(こうしつ)」と言います。触るとふにふにと弾力があり、柔らかめのグミのような感触です。



「ワルトン膠質(こうしつ)」と言います。触るとふにふにと弾力があり、柔らかめのグミのような感触です。

ワルトン膠質は3本の血管を守るためのものです。血管がそのまま露出していると、少しの圧迫で閉塞してしまう危険性があります。この3本の血管は栄養を運んだり、酸素を運ぶ、赤ちゃんにとって大事な命綱です。お腹の中でたくさん動く赤ちゃんは、へその緒が体に巻き付いてしまったり、自分で握ってしまったたり、陣痛がきた時など、血管を圧迫してしまう機会がたくさんあります。それをワルトン膠質が守ってくれるのです。とはいえ、ワルトン膠質にも個人差があります。この写真の子はワルトン膠質を含め、へその緒の断面が1.5cmほどありますが、中にはこの半分くらいの細さの子もいますし、赤ちゃんの成長に応じて太くなつていくので、早産であれば、もっと細い子もいます。当院で産まれる赤ちゃんのほとんどは妊娠37週以降で産まれるので、おおよそ1cm〜1.5cmくらいの太さになります。

へその緒は産まれたあとすぐに専用のハサミで切断します。写真にあるクリップはこのときに必要になります。(お菓子の口を閉じるクリップと似ています)産まれてすぐのへその緒にはまだたくさんの血液が流れていて、触ると脈拍に合わせてドクドクしています。その状態を切断しようすると血液が垂れ流しになってしまうので、それを防止するためクリップが必要になります。



切断し、赤ちゃんに繋がっているへその緒は2週間ほどで自然にとれます。大きなかさぶたがとれるのと同じような状況ですので、多少の血がにじんだり、じくじくしたりしますが、消毒を繰り返していくうちにきれいになっていきます。

とれたへその緒はとっておく方が多いのですが、これは日本人独特の文化です。やはり海外の患者さまでへその緒がほしいという方はほとんどいません。へその緒を保管しておく意味をネットで調べてみると・・・

- ・へその緒を煎じて飲ませると薬になる
 - ・生命力に繋がっていたものなので、失くしてしまうと持ち主が病弱になる。
 - ・魔除け、厄除け効果
 - ・夜泣きがひどい時にへその緒を舐めさせると夜泣きがやむ。(舐めさせるのではなく、トイレに吊るす話もあり)
- など、諸説あるようですが、現在は記念としてとっておく方がほとんどでしょうね。

◆今月の赤ちゃん



上に載っているへその緒の写真、持ち主はこの子です。妊娠38週0日に予定の帝王切開で3345gの女の子。へその緒がとっても立派なので、クリップで止めるのが大変だったそうです。太くてしっかりしたへその緒だから、ママからたくさん栄養をもらって大きくなったんだね！